

講座

事例研究法をめぐって 9

仮説生成法としての事例研究 —フィールドワークを中心に—

箕浦 康子

研究には、現実を観察することから理論を立ち上げ、新しい知を生み出していくタイプと、先行研究から何らかの仮説を立て、他の研究者の知見を精緻化したり反駁したりするタイプの2種がある。前者を仮説生成型、後者を仮説検証型という。仮説生成のためになされる事例研究には、一個人や一家族を研究するものから学校とか病院などの施設でフィールドワークをするもの、研究対象をもっと限定して保育園での園児同士の相互交渉などの微細な観察ユニットを事例とするものなど、さまざまなサイズのものがある。フィールドワークは、参与観察・フォーマルおよびインフォーマルインタビュー・文書資料の収集などを駆使して、一つのフィールドを事例として多面的なデータを集める。フィールドワークでわかったことや生成された仮説を書くプロセスおよび書かれた著作をエスノグラフィーといい、そこで最終的に提示される仮説を、データに根ざした理論 (grounded theory) という。

フィールドワークは、社会的現実を観察することから新しい仮説を生成することをめざすもっとも本格的な事例研究法なので、以下では、フィールドワークに

焦点を当てて仮説生成法としての事例研究について考察したい (詳細は、箕浦 1998)。

1. 研究方法論と研究方法

研究方法論 (methodology) とは、新しい知をどのようにして手に入れるかに関するメタレベルの論議であり、研究方法 (methods) は、それぞれのメタアプローチのもとに開発された具体的なデータの集め方である。仮説生成法という研究方法について語る前に、さまざまなデータ収集法の基底にある三つのメタレベル、「実証的アプローチ」「解釈的アプローチ」「批判的アプローチ」が、暗黙のうちにどのような前提に立っているかを述べておきたい。心理学をはじめとする諸学問分野で今でも支配的なのが、自然科学の研究手法に依って立つ実証的アプローチ (positivistic approach) で、これこそが、科学的研究法であると多数が信じている。専門課程のカリキュラムとして教えられる研究方法も実証アプローチ一色のため、学生はそれ以外の方法はないと信じ込まされていることが多い。

それに対して、ウェーバーの流れを汲み、人間は意味を求める社会的存在であることを大前提としている解釈的アプローチ (interpretive approach) は、人間行動を人が生きている社会的・文化的文脈のなかで理解しようと試み、フィールドワークを支えるメタレベルのオリエンテーションである。フィールドで出会う人々は、「自ら紡ぎ出した意味の網の目に支えられ (Geertz 1973, 5) ているのであり、そのような網の目が文化で、その上で、そのような網の目にとらわれた人々がどのような意味世界に生き、どのように行動するかを事例に即して理解しようとする。しかし、そうした理解も、社会的現実についての多様な解釈の中の一つに過ぎないことに留意したい。批判的アプローチ (critical approach) は、現実を構築されたものと見る点では解釈的アプローチと近いが、現実を変えて



Yasuko MINOURA お茶の水女子大学大学院人間文化研究科教授

著者紹介〔略歴〕京都大学文学部を卒業後、京都家庭裁判所に11年間つとめる。1967年に、ニュージャージー臨床心理インターンシップ・プログラムに参加、臨床心理士の資格を取得。

京都家庭裁判所調査官として復職。1973年に退職して留学。ヴィクトリア大学よりM.A. (社会学)、カリフォルニア大学ロスアンゼルス校より、Ph.D. (文化人類学)を受く。1980年より岡山大学文学部 (社会心理学)、1993年からは東京大学教育学部 (比較教育学・心理人類学)、1999年4月からはお茶の水女子大学で教鞭をとっている。主著は、『子供の異文化体験—人格形成過程の心理人類学的研究』(思索社、1984)、『文化のなかの子ども』(東京大学出版会、1990)など。〔連絡先〕E-mail: mino@li.ocha.ac.jp

いこうとする志向性がある点異なる。

2. 三つのメタレベルのアプローチの比較

事例研究法としてのフィールドワークは、解釈的アプローチや批判的アプローチとの親和性が強い。解釈的アプローチでも批判的アプローチでもデータは重視されており、広い意味では実証的であるが、三つのアプローチの間には、社会的現実の見方に根本的な相違があるのみならず、研究の焦点や目的、研究対象者への対し方などが以下のように違う。

① 社会的現実の把握様式：社会的事実の認識様式としては、コントやデュエルゲームの流れを汲む実証主義的アプローチとウェーバーの流れを汲む解釈的アプローチが古くから共存してきた。社会科学の分野では1950年代より実証的アプローチが優勢となり、現実には誰が見ようと同じに見える「本質的なもの」として実在していると考え、その客観的現実について法則を定立することをめざした。研究対象のさまざまな側面を測定することにエネルギーを傾注し、数値化されたデータを統計的に処理すれば科学性が担保されるのかのとき錯覚が蔓延していた。

解釈的アプローチでは、現実にはさまざまな相貌をみせるマルチなもの、人々が生きている現実、再構築されたもの (reality remade) で、人は、そうした思い込みの世界で生きていると考えて事例を解釈する。本質主義に立つ論理実証主義では、再現可能な一定の手続きで明白な証拠を得て、それを理論的に説明できたとき、その発見された事実を「客観的」とするという合意が共有されてきた。これに対して、解釈的アプローチは、客観的現実の存在そのものに懐疑的で、人々が自分が生きている社会をどう解釈しているか（どう構築するか）を知ることこそが研究の一つの目的であると考え。彼らによれば、実証主義の手法で得られた「客観的事実（データ）」も、一連の知的操作を通して「再構成された事実」であって、事実そのものではないということになる。

批判的アプローチでは、構築されたものなら作りかえることができるという立場をとる。実証主義の枠のなかでの研究は、現状を黙認し結果的にはそれを維持することに加担するだけに終わり、現状を変えていく力は得られないことに気がついた。人々に現状変革の力をつける (empower) 研究を志向するフェミニズム運動のなかで批判的アプローチは育っていった。

② 研究の焦点とプロセス：実証的アプローチでは、

観察可能な行動に着目し、客観的に「測る」ことがデータ収集プロセスの中心で、正しく測るため条件を統制し、ノイズを除去し、変数を操作することで因果関係を把握しようと試みる。解釈的アプローチでは、意味を研究者と対象者がともに理解することが肝要とされ、観察対象者の生活世界をそのまま与件として受け入れ、行動や状況に埋め込まれた意味、研究対象者が生きている意味の世界を「分かる」ことをめざす。解釈的アプローチは、「事象や対象を測定すること」のなかで埋没し見失われた、「対象を理解する」という了解的スタンスでデータを見ていく。批判的アプローチに立つ事例研究では、事例を取りかこむ不平等な社会構造や抑圧のパターンに着目し、事例に作用している力関係を分析する。そうした社会構造を「変えていく」ことが研究の焦点となる。

③ 研究の目的：実証的アプローチでは、行動を律している普遍的な法則の定立が目的である。解釈的アプローチでは、社会的相互作用やそこで伝達されている意味を分析することで、特定状況における人間行動の規則性について理解を共有することが目的である。批判的アプローチでは、隠された権力による統制を明らかにして、不平等をあばき、解放のスタンスを育み、社会構造や人々の行動（社会的実践）に変化を引き起こすことが目的である。

④ 研究の対象者との関係：実証的アプローチでは、被験者・被調査者を実験者の教示通りに動く受動的なインフォーマントと見なしているのに対して、解釈的アプローチでは、観察対象者は能動的な人間であり、意味の共同構築者と考える。批判的アプローチでは、研究対象者は協力的な学習者であり、一緒に学ぶ人である。

⑤ 研究者のスタンス：実証的アプローチでは、研究対象との間に距離をおき、研究対象の外に立ち研究対象世界を上から俯瞰する。解釈的アプローチでは、研究対象のいる場に身を置き、相手に共感しながら、対象を文脈もろとも理解することに努める。解釈的アプローチでは研究対象の活動に参加し、研究対象とよい関係を築き、能動的な協力者になってもらうことをめざす。批判的アプローチでは、研究者は、批判的意識の覚醒を促す教師であり、対象者とともに学ぶというスタンスを維持する。

自然科学をモデルにした実証的アプローチに立つ人は、一つフィールドで多面的なデータをとったとしてもフィールドワークは所詮一事例の研究にしかすぎず、

事例研究法をめぐって

そこから一般的な結論は出せないのではないかと研究結果の普遍性に疑問を呈する。しかし、解釈的あるいは批判的アプローチに立つ人は、実証的アプローチが信じているような普遍的な社会的現実の存在そのものを疑っているのである。

3. 事例研究法としてのフィールドワークの特徴

フィールドワークは、対象者と接するのはその時だけの実験研究や調査と違って、「持続性と関与性」「微視性と全体性」「柔軟性と自己修正性」の三つの特色がある (Gaskins *et al.* 1992, 15-17)。『行為と発話形成のエスノグラフィー—留学生家族の子どもは保育園でどう育つのか—』(柴山 2001) を例にとって、その方法としての特徴と独自性について述べる。

「持続性と関与性」とは、日常生活が行われている場に参加して、継続的にフィールドに関わることである。柴山は、東京都区のある一つの区立保育園で、6人の2, 3歳児を1年半にわたって継続観察した。この本は、一つの区立保育園でのフィールドワーク中に観察した6人の中国や韓国からきた留学生の子どもの事例研究を重ねることで得たデータをもとに、行為・発話・自己の形成過程について新しい知見を書いたものである。

「微視性と全体性」とは、活動や行為の観察から意味を引き出すためには、行為の微視的記述とともに行為を取りまくより大きな状況にも広く目配りすることである。微視的な一つの事象、例えば、「保育園で子どもがおもちゃの取り合いをした」において、けんかが起こった状況とともに保育者や子どもの発した言葉がそのまま写し取られている (柴山 2001, 100)。しかしこうしたある特定の子ども同士の特定の文脈でのおもちゃの取り合いという事例は、特殊個別的なものとしてではなく、他者の承認を待つ社会性を保育者の支援を受けて実践できるようになっていく道筋と解釈されている。保育者が「おもちゃの順番使用」のルール (この保育園での文化実践) を2, 3歳児にどのように教えているとか、暴力的に自分の欲しいおもちゃを他児から奪うのではなく、「かして」とか「いーれーて」と言葉で要求できるようになっていくプロセスといった特定の微視的事象は、普遍的な発達のテーマや保育園文化全体のなかに位置づけられている。

「柔軟性と自己修正性」とは、研究対象に関するデータのみならず、方法論上の間違いやインフォーマントに対する誤解も記録され、研究設問や調査の枠組、

観察の焦点を柔軟に変えて、自ら研究の進路の修正を行うことをいう。できあがったエスノグラフィーは、どこか一つの視点から書かれているが、そこに至るまでには次節で述べるような自己修正を繰り返す。

4. 仮説生成型研究の実際

比較的長期のフィールドワークによる仮説生成を例に取れば、そのステップは、① フィールドサイトを選定し、② フィールドの全体像を把握し、③ 問いを立て、④ 観察のユニットを定めて焦点観察を行い、⑤ 観察結果を読み解くための理論枠組の探索を行い、⑥ 理論に導かれた事象の選択的観察を実施して、⑦ 知見を得て、それを解釈し、⑧ エスノグラフィーを書き上げる、8段階からなる。しかし、これらの各段階は、互いに重複している。データの収集と分析が循環するなかで仮説が生成されていく中核となる⑤から⑦は、直線的に進行するのではなく、行きつ戻りつを繰り返す。また、⑧の段階に移行し、エスノグラフィーを書いている途上で新しい視点を得て、またフィールドノーツをひっくり返して、⑤、⑥、⑦のプロセスを繰り返すことも珍しくない。データ収集と分析が相互に依存しあいながら螺旋状に上に詰めていき、漠然とした「問い」から、より理論的な「問い」へと精緻化していく柔軟なリサーチデザインこそが、仮説生成型研究の特色であり、リニアに進む仮説検証スタイルの研究とは異なる難しさと醍醐味がそこにある (箕浦 1999, 42-55 参照)。

実証研究では、どのような研究スタイルをとるにしろ、① 問いをいつ立てるか、② データをどこから得るのか、③ データのカテゴリゼーションをいつ、どのようにして行うのかを決めなければならないが、この3点が仮説生成法は仮説検証法とは異なる (詳細は、箕浦 1998)。

① 問いをいつ立てるかだが、仮説検証研究では、問いもデータのカテゴリゼーションも、いつも対象に接する前に決まっている。まず自分の発した問いに対して仮説を立て、仮説に見合ったカテゴリーのデータを収集する。仮説生成型研究では、まずフィールドに入って、ある程度データを集めてから問いを立てる。勿論、フィールドとしてどこを選ぶかの段階で、およそ何について研究したいか方向は決まっており、全く白紙でフィールドに入るわけではないが、フィールドに入る前に立てた問いは、フィールドの現実をみて大幅に修正され、問いを立て直すのが通例である。こ

うして立てた問いも、データ収集・分析の進行につれて変化し、素朴な問いからより理論的な問いへと精緻化される。たとえば、柴山（1999）は、保育園で「外国人幼児は、日本の保育園にどのように馴染んでいくのか」という漠然とした問いから外国人幼児の多い某保育園でのフィールドワークをはじめたが、途中入園してきた中国人5歳児に観察の焦点を合わせ、「Oちゃんは、日本の保育園にどのように馴染んでいくか」という問いに切り換えた。その後、「新参の外国人幼児は、日本の保育園スクリプトをどのように身に付けていくか」という理論的な問いへと精緻化され、食事と自由遊び時間の行動を保育園で必要とされているスクリプトの獲得という観点より観察するようになった。フィールドワークの進行とともに研究設問が変わり、それとともに観察のユニットがよりシャープに限定されていったことがよくわかる。

次に、② データをどこからどうやって得るのかだが、実験室実験では、被験者を連れてきて脱文脈化した実験室でデータを採集するが、フィールドワークでは、人々が生活している自然な状況のなかでデータをとることに第一の特徴がある。観察すると決めた変数だけに着目して他の要因を因果関係を確定するためのノイズとみてなるべく統制しようとする実験室研究との大きな違いがここにある。第二に、観察者自身が道具となって、自身が見たこと聞いたことがデータとなる。第三の特徴は、観察対象の全体性を損なわないように、文脈を重視して、いま起こっていることを直接把握することである。①、②のデータ収集の段階では、よく見て、よく聞いて、よく記録できるかどうか、研究が成功するかどうかの分岐点となる。

③ データのカテゴリライゼーションをいつ、どのようにして行うのかについてだが、仮説検証型研究では、データ収集終了後に分析が始まるが、分析カテゴリーはデータ収集前にあらかじめ設定されている（質問紙調査では、質問項目がカテゴリーを体現していることが多い）。フィールドワークでは、データ収集と分析が同時進行し、分析カテゴリーも収集されたデータを見ながら析出する。データから意味を読みとり、概念カテゴリーを生成するが、データの切り口としてよいカテゴリーを見つけることが出来るかどうか、研究のオリジナリティを左右する。分析カテゴリーは、データ収集が進むにつれて変化することもよくあり、その都度フィールドノーツはひっくりかえされ一から分析をやり直すことになる。

概念カテゴリーの生成は、何が語られているのか意味を読みとり、抽象的な概念に置き換える作業で、新しい解釈をできるだけ多く生み出すことに努めるオープン化の段階、オープン化によって生み出した個別概念を取捨選択し、残った概念間の関係を考える解釈の段階がある（木下 1999）。多数の仮説的な解釈からより妥当なものへと狭めていく時に使われるのが、理論的サンプリングである。概念の有効性や解釈の適切さを確かめるために、次にどこで、どのようなデータを収集したらよいのか、あるいは、データをどう読み直したらよいのかを決定する。こうして析出したカテゴリー間の関係についての洞察を仮説として提示したものが「生成された仮説」である。オープン化の段階で、よい概念をより多く産出するためには、研究者の当該の問題に対する覚醒度、洞察、想像力、柔軟性（拡散思考）が必要である。

5. フィールドワーク研究の評価基準

ここでは、エスノグラフィーもしくは事例研究の論文が、ルポルタージュや日記から区別され、研究論文として評価に耐え得るものになるために満たすべき要件とはなにかについて検討する。

投稿論文の評価は、その学問の支配的な潮流を体現している査読者の評価基準に左右され、行動科学、特に心理学では、解釈的アプローチによる論文も実証的アプローチの枠組で評価され、科学的でないという理由で不採択になることが多かったが、近年はフィールドワークに基づく論文が賞をもらうようにならってきた（村本 1996；刑部 1998）。第2節で述べたように、そもそも社会的現実をどう見るか（世界観）や研究に対するスタンスなど認識論そのものが違うで、独自の評価基準をめざすべきだと主張されている。私もその立場に立っているが、やはり解釈的アプローチなりに評価基準は明示されるべきだと考える。

評価基準は、① 収集されたデータの質に関して、② 研究プロセスの適切性に関して、③ 得られた知見についての三つのレベルで別々に論じられるべきであろう。まず、① については、行動記述が文脈のなかに組み込まれて正確に・綿密になされていること、また、どのようなデータを収集するかが、理論的関心によってなされ、かつ仮説にあわない事例の分析がきちんとなされていることが必要である。② に関しては、データの収集・分析カテゴリーの析出プロセスが明らかであること。また、フィールドでの自分の役割・位

事例研究法をめぐって

置づけに自覚的で、それが記述されていること。③に関しては、得られた仮説や知見が豊かな記述データに根ざしていて、読み手に「なるほど納得した」と思わせるものであること、分析カテゴリーや知見のデータへの適合性が高く、理論的な示唆を含むことなどである。

家政学は門外漢なので、本論の例は心理学分野のものになってしまったことをお許し願いたい。学問分野特有の評価基準があつていいと考えているので、上記は参考にとどめ家政学分野の論文の評価基準を考案して頂きたい。留意すべきは、フィールドワーク向きのテーマとそうでないものがあるので、家政学でフィールドワークを採用する場合は、研究の主題と方法が適合的かどうかの吟味が不可欠である。

また、本小論では割愛したが、フィールドワーク研究を志す時は、研究倫理の問題に留意していただきたい。拙著（1999）や「日本民族学会研究倫理委員会（第2期）についての報告」（祖父江 1992）を参照のうえ、フィールドワークを開始するようにお願いしたい。

引用文献

- Gaskins, S, Miller, P.J., and Corsaro, W.A. (1992) Theoretical and methodological perspectives in the interpretive study of children, in *Interpretive Approaches to Children's Socialization* (ed. by Corsaro, W., and Miller, P.J.), New Directions for Child Development, No. 58, Jossey-Bass, San Francisco
- Geertz, C. (1973) *The Interpretation of Cultures: Selected Essays*, Basic Books, New York
- 刑部育子（1998）『ちょっと気になる子ども』の集団への参加過程に関する関係論的分析，発達心理学研究，**9**，1-11
- 木下康仁（1999）『グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生』，弘文堂
- 箕浦康子（1998）仮説生成の方法としてのフィールドワーク，『教育のエスノグラフィ』（志水宏吉編著），嵯峨野書院
- 箕浦康子（編著）（1999）『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィ入門—』，ミネルヴァ書房
- 村本由紀子（1996）集団と集合状態との曖昧な境界：早朝の公園で見出される多様なアイデンティティ，社会心理学研究，**12**，113-124
- 柴山真琴（1999）ある中国人5歳児の保育園スクリプト獲得過程—事例研究から見えてきたもの—，『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィ入門—』（箕浦康子編著），ミネルヴァ書房
- 柴山真琴（2001）『行為と発話形成のエスノグラフィ—留学生家族の子どもは保育園でどう育つのか—』，東京大学出版会
- 祖父江孝男（1992）日本民族学会研究倫理委員会（第2期）についての報告，民族学研究，**57**（1），70-91